

The reintegration into daily life of parents who have experienced the loss of a child, starting from building another lifestyle with their deceased child

メタデータ	言語: eng 出版者: 公開日: 2017-10-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Inoue, Hitomi メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/28508

博士論文審査結果報告書

報告番号 医博甲第2059号
学籍番号 0427022002
氏 名 井上 ひとみ

論文審査員

主 査 稲垣 美智子 (教授)

副 査 木村 留美子 (教授)

副 査 須釜 淳子 (教授)



論文題名 The Reintegration into Daily Life of Parents Who Have Experienced the Loss of Child,
Starting from Building Another lifestyle with Their Deceased Child.

(邦文) 死別体験から始まる子供を亡くした親の日常生活の構築

論文審査結果

論文内容の要旨

本研究は、子供を亡くした親が、「私たち」にしかわからない」と表現する死別体験、日常生活の構築を、質的帰納的研究方法であるエスノグラフィーを用いて明らかにした。対象は3つの家族会へ参加した25名の家族であり、レイニンガーの「見知らぬ人—友人モデル」「観察—参加—再確認モデル」を参考にして実施した。さらに2004—2008年にわたる、家族会への参加観察、分析段階での患者会の4年間の会報を補完データとして用いてデータの真実性を得た。

その結果、子供を亡くした親は、悲嘆を克服するようとの周囲からの接し方に「悲嘆を増幅する普通の対応」と感じ、祖父母や親戚や周囲の人が亡くなった子供のことを忘れたかのように「子供の不在が日常生活に浸透していく現実」、さらには親である自分自身にも起こってくる<子供の感覚の退色>など「親自身に生じる子供の像の希薄化」に戸惑う姿を描いた。その体験は、子供の喪失、関係の喪失、親自身の価値観の喪失でもあると説明付けた。またこの体験は<普通の人と一線を画す>状態をつくり、<亡くなった子供をイメージしながら活動する>顔と時間を持つ一方で、<子供を失ったことを受け入れている>いわゆる普通の人かと思いつく顔と時間の両方を持ち使い分ける、「2つの顔と2つの時計を使い分ける」方略で周囲に対処していた。そして<子供のライフサイクルを辿る><親役割を継続する>などあたかも子供が生きているような行動をとる一方で、亡くなったことを認め<子供を社会に発信する>など「亡くなった子供の親として生きる」ことにより死別した子供を生かしていく生活をしていることを描いた。

審査結果の要旨

本研究は、子供を亡くした親に対するケアの困難さを、特有の経験をしている人の集団がもつ特徴を描くレイニンガーのエスノグラフィーの分析方法を用いて明らかにした。審査では、公開審査時の質疑への対応、研究方法の説明、一部の英語表現に課題があるとの指摘があった。しかしながら本論文の結果は、遺族会に参加している人という適応範囲の限定はあるものの、従来の喪失・悲嘆プロセスのように段階的に回復するモデルとは異なり、悲嘆していることそのものを肯定的に意義あることと捉え、社会との対応には2つの顔と時間を使い分けて対応し、日常生活を構築していることを明らかにした点において独創的である。今後の悲嘆ケアに影響する可能性を含んでいるとも評価した。よって博士論文としてふさわしく博士(保健学)の学位を授与に値すると評価する。